



「やってみよう」を自分できめる

園長 野中 泉

10月には、アトムフェスティバル（4・5歳児の運動会）があります。すいか・みかんのページには、アトムフェスティバルに向かう子どもたちの様子が書かれていますし、フェスの話しをするクラス懇談会も続いています。

アトムフェス（アトムの運動会）は、他の園の運動会や、私たち自身が学校で経験してきた運動会とは少し様子が違います。大人に見てもらうためだけに長い時間練習を重ねるようなことはしませんし、子どもたちがやりたいことを考え、毎日のあそびの延長線上の「やってみよう」が並ぶ運動会ですから、はじめて見る保護者の皆さんは「何しているのかな？？」と戸惑ってしまうような迷演技や珍競技も少なくありません。実は戸惑うのは、親だけではないのです。特に、はじめて4・5歳の担任を持つ若い保育士や、他の園から転職してきた保育士たちは、必ずと言っていいほど「アトムの運動会は難しい。子どもたちが自己決定していくってどういうこと？」という壁にぶちあたります。もちろん、アトムフェスは担任だけが支えるのではなく、主任・園長もフェスの実行委員会メンバーもサポートしながらすすめていくのですが、実際何年か前も他園の経験がある4歳児担任が実行委員会の会議で「子どものやりたいことを尊重したつもりが、子どもの言いなりになることだけが保育か？」と問われ「良かれと思って大道具、小道具を先に用意したら、子どもたちが考え、実現させていく過程を追い越さないで」と言われた、もうどうすればいいのかわからないと泣きました。つまり、子どもたちが主体で大人は伴走者に徹する運動会は、大人の決めたプログラムを大人の指示通りに練習させることよりずっと難しいというのです。

そうかな？とも、そうだろうなとも両方思います。でも、私は見守る大人たちのそんな誠実な葛藤も含めて、やっぱりアトムフェスが大好きです。

話はちょっと変わりますが、少しまえ、長年プレーパークを運営してきた方にこんな話を聞きました。「はじめてプレーパークに来た子に『すみません、あの木に登ってもいいですか？』って聞かれることがよくあります。最初から大人の許可を求めに来るのです」。もうひとり、友人の大学の教員には、こんな話を聞きました。彼のゼミの大学生の言葉です。「自分たちは、小さい頃から言われたことをやるが多かった。育つ過程では親からも先生からも「あれしろこれしろ」の指示語がたくさんあったのに、大学生になったらいきなり「自分で考え自分で決めなさい」と言われる。正直その言葉は、急に素っ裸で北極に投げ込まれるような冷たい厳しい声と感じる」。大人の目線に支配されている子どもの時間、大人の奪ってきた子どもの力を痛感させられる話です。

「あの木に登ってもいいですか」と「大人の許可」を求める言葉は、「自分で決めることが怖い」というふうにも聞こえます。その子は、この時間をどう過ごすかを決めることは自分には許されていないと感じているのかもしれませんが、やってみようと自分で決めることは、その結果を引き受ける覚悟をすることでもあります。痛い目にあっても誰のせいにもできない。少しおおげさな言い方になるかもしれませんが、それは「自分の人生を生きる」ことでもあるのです。

アトムフェスは、子どもたちが自分たちの「やりたい」「やってみたい」を実現する行事です。そして、それはアトムフェスという特別な一日だけのことでなく、私たちがアトムの毎日で繰り返して大事にしていることでもあります。「やってみたい」を言葉にするのに勇気が必要だった子が友達に背中を押されて勇気が出せたり、友だちの姿に憧れてやってみたくてできなくて悔しい思いをしたり、「やりたい」の願いから何度も何度もあきらめず挑戦したり。子どもたちの「やりたい」にはたくさんのドラマがつまっています。どうぞ、当日は、そんな子どもたちひとりひとりが主人公になる時間を応援しに来てください。